第２１６号

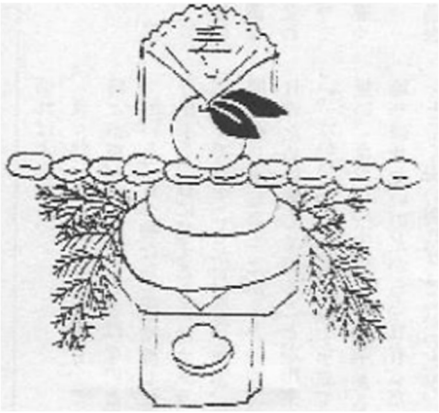
芥川だより

発行日＊２０２５年１月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編　集　　川口　伸
発行人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

世界はトランプ次第か？



世界のみんなが注視しているのはアメリカの次期大統領トランプだ。これまでの軍事費や援助を徹底的に見直すと予想されるからだ。それほどアメリカの金のばらまきは大きいということだ。金が無ければ何も出来ない。軍隊も国連機関も動かなくなる。

口は出すけど金は出さない、悲しいけど国際社会でも長く行われてきた慣習だ。何か問題が起きれば、新たな機関を作り対応する。そのたびに多額の資金と人材が要る。そんな事の繰り返しで膨大な組織になってしまった。その資金の多くをアメリカが背負いやってきたが、もうやれないということだろう。

肝心のアメリカ自体が弱ってきて国民の不満が爆発しそうになっているのだろう。トランプ支持者の熱狂振りやホワイトハウス乱入事件を見ても大きなうねりを感じる。一方、独裁国家ロシアは何とか国体を維持しプーチン大統領は盤石な政権維持を狙っている。親露派とみられる中国は現代の世界状況が続いて世界経済の覇者を目指している。大きな戦争は起きてほしくない。

われわれ日本は、どうすることも出来ずに未知のトランプ政権に白紙委任状を渡す。アメリカが軍事費増強を日本に強く要請しながら、在日・在韓米軍の削減を着実に行ってくる。もう基地の重要性が薄らいでいるからだ。従来の戦争は通用しなくなり新たな戦略が開発される。軍隊の民間委託や傭兵部隊の増強などによって戦争を大きなビジネス化する。少子高齢化が止まらない日本や韓国においてはもはや従来型軍隊は維持できない。

今後、世界の戦争は戦争プロデューサーともいえる民間企業が請負い国の責任が放棄される。そうなれば戦争責任がますます追求しにくくなる。ほんとうに無法地帯の世界で生き残るのは限られた国や市民たちだろう。多くの人々は難民として流浪の民になるにちがいない。今こそ、一人一人の勇気ある決断力と覚悟が必要だ。

死をめぐるあれやこれ（１２１）　石川　吾郎

おもい　ねんぐ　重賦

なつ　あきに　おさめる　ぜいは
そもそもは　ひとの　よの　ため
その　はじめ　だらくを　ふせぎ
あきらかに　みことのり　あり
ぜいのほか　よけいに　とるは
ほうりつを　まげるものなり

ああ　しかし　とし　へる　ままに
やくにんの　わるい　ならわし
うわまえを　はねて　へつらい
しぼりとる　ふゆにも　はるにも
きぬおりは　なかなか　できず
いとまきも　すすまぬうちに
やくにんは　むごい　さいそく
いささかも　ようしゃは　しない

これは中国文学者・武部利男氏のかな訳による中国唐時代の白楽天の詩の一部。重税と官吏の容赦ない取り立てに苦しめられる庶民の嘆きを描いたもの（『白楽天詩集』より。漢詩の本文は略）。◆一方わが国、「百姓は生かさず殺さず」とも言われた江戸時代の年貢率は時代によっても違うが一般には「四公六民」や「五公五民」が標準といわれた。現代ではどうだろう。国民負担率(租税負担と年金負担を合わせたものの、所得に対する割合)は令和四年

で四十八・四％であったという。単純比較はできないものの、江戸時代の農民と同程度といえないか。これで日本社会が発展している数字なのだろうか。◆先般の総選挙で税負担の軽減を主張し支持を得て急伸した国民民主の「一〇三万円の壁を一七八万円に引き上げる」との政党間の約束を、半数割れした自民は自民税調の密室で一二三万円と有無を言わさず決めてしまった。ＳＮＳでは税調会長・宮沢洋一に対して、「国民の敵」とのハッシュタグが拡散しているという。これには私も大いに同意する。

芥川だより二一六号　目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム１２１	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　１３０	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談８０	祖蔵哲	3
大峰奥駆道８６	下村嘉明	4
同じ青春を過ごしたセツラーの想い	大井通正 中西正人（ゴエモン）	5
ボケ老人の雑話　９	明石幸次郎	8
オクラの山たより１００	因了生	9
隠された歴史７５	満田正賢	13
俳句	影山武司	15
編集後記	ＳＫ生	15
ふみの道草７９	山椒魚	16

素老人☆よもだ帳（１３０）

坂本一光

◆サンタクロースって　ほんとに
　いるの？

これは、福音館書店が「かがくのとも絵本」シリーズの一冊として一九八一年に出版した絵本の表題である。書いた人は、てるおかいつこ（暉峻淑子）。バブルの絶頂期一九八九年に「豊かさとは何か」を問い、二〇〇三年不景気のどん底で再び「豊かさの条件」を問うた経済学者である。豊かさの本はいずれも岩波新書である。すぎうらはんもの絵もいい。

以下は、お父さんとお風呂に入りながら、炬燵で年賀状を書いているお母さんの横で、あるいは家族で夕食をしながらの、親と子の問答である。

ねえ　サンタクロースって
ほんとに　いるの？
・いるよ

えんとつがなくても　くるの？
ドアに　かぎが　かかっていても
くるの？
・へいきさ

どうして　ぼくの　ほしいものが
わかるの？
・こどもの　ほしがっているものが
わかるひとだけが　サンタになれるんだよ

どうして　よなかにくるの？
・おれいを　いわれるのが　はずかしいからだろ

どうして　おとうさんや　おかあさんには　こないの？
・こどものときに　たくさん　もらったからね

サンタは　なつのあいだは　どうしているの？
・おくりものの　じゅんびの　あいまにすこしは　なつやすみを　とるんじゃないかな

サンタなんて　いないって　みんないってるよ！　あれは…
・いるとも　ほんとだよ

じゃ、どうして　としとって
しないの？　むかしから　いるんでしょ！？
・サンタのこどもも　そのまたこどもも
サンタになったんだろ

じゃ、どうやって　ひとばんで
せかいじゅうを　まわれるの？
・ひとりで　まわりきれなければ
てつだってくれる　なかまを　よぶんじゃないの

どうして　そんなにたくさん
おくりものが　できるの？
・せっせ　せっせと　ちょきんをしたのかしら　それとも　きふがあつまるのかな　こどもたちに　あげてくださいってね

みなみのくにでは　どうするの？
ゆきがなければ　ソリは　つかえないよ
・ソリがだめなら　さあ、ヨットかな　じでんしゃかな

こないうちもあるのは　なぜ？
・びょうきの　この　そばで　あさまではなしこんでしまって　まわりきれなくなったのかなあ

ねえ、ほんとうにいるの
・いるよ　さんたくろーすはね
こどもを　よろこばせるのが
なによりの　たのしみなのさ
だって　こどもが　しあわせなときは
みんなが　しあわせなときだもの
サンタクロースは　ほんとにいるよ
せかいじゅう　いつまでもね

読み終えて、この絵本を「かがくのとも絵本」とした出版社の見識に頭が下がる思いがした。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（８０）

祖蔵　哲

～第四の危機の時代へ～

「早いもので」はもう口癖になっているが、２０２５年がやってきた。果たして「時」は私たちにとって受身的に「到来する」「流れる」のか。一方で我々の方から「迎える」「入る」のか。「暗い時代」が到来するのであれば、積極的には迎えたくはない。しかし、流れてくるものであれば仕方がないのか。だが、私たちには流れを変えることができるはずである。皆の力で。

その過ぎ去った昨年度の流れはあまりいいようには変えられなかった気がする。去年は「選挙の年」であった。しかし、選挙だけでは時代が変わらない。なぜなら「選挙」は他人任せであるからだ。久しく人々は直接、自分の力で時代を変えることをしてこなかった。リアル社会では時代を五感で感じ取れるが、今や、大きく仮想現実化してきているネット社会ではその感覚は薄い。ネット空間では「受け入れがたい真実より心地よい嘘」が好まれる。つまり「質よりも量」の「ポスト・トゥルース」の社会の到来である。それは、耳なじみのあるあの「新自由主義経済」がシンギュラリティという科学技術を抱え込んだ結果でもある。我々はかつてどの時代にもなかった未経験の時代に「流されて」来ているのである。

『戦後は遠くなりにけり』

時代といえば、昭和６年、中村草田男は「降る雪や　明治も遠くなりにけり」と詠んだ。

まだ６年しかたっていないのに。今年は昭和元年から数えて９９年。昭和は十分遠い。そして、かの大戦後からはちょうど８０年、これも遠くなった。「もはや戦後ではない」とは敗戦後１１年の１９５６年の経済白書での言葉である。果たして、侵略責任謝罪問題、原爆投下など真に解決したのであろうか。

さて、毎年恒例になった今年はどんな年かを、哲学者としては禁断の手であるＡＩを使って選んでみよう。

（１）　ＡＩが選ぶ２０２５年予測

選んだのは「２０２５年問題の顕在化」である。戦後の団塊世代が全員７５歳以上となり、高齢化が一段と進むことで、働き手不足や社会保障費の増大などの問題が顕在化するという。実をいうと、この「爺い」も今年で後期高齢者の仲間入りをする。この現象の背景には「人口の減少化傾向」がある。「労働力不足」は経済、社会面で大きな影響を及ぼし政治的不安定をもたらす。この人口構成はずっと前から問題化されていたが何等の抜本的な解決策も取られずにいよいよ本番に突入してきたという感じがする。これもその場その場の興味にしか関心がない「ポピュリズム政治」の結果であろう。

今年も「選挙の年」の余波は続く。いよいよ今月２０日にはトランプが大統領に就任する。トランプ 2.0 である。３月にはドイツ議会解散総選挙が行われる予定で、これも右派の進出が予想されている。日本でも７月には参議院選挙が行われるが、これも今から衆議院同時選挙になるかと騒がれている。いずれの選挙にしても昨年から顕著に表れているのが「ネット社会」の影響力である。旧メディアとの対決はいよいよオルテガの言う「大衆の時代」の最終形態になるのか。

（２）危機の時代

前月でも参照した、スペインの思想家オルテガは、社会が持つ信念体系が崩れ、新たな価値観がまだ確立されていない時代に「西洋歴史の危機」が訪れると考えた。それは彼自身が全体主義と民主主義の間の中で両大戦間を生きた実感からくるのであろう。彼によれば、このような状況は過去にも3度現れており、古代ローマの共和制の終焉、中世の終わり、そして現代であるという。第一の危機、ローマ帝国の滅亡はギリシャのポリスにおける民主主義の崩壊から法による世界秩序が壊れだした時代。第二の危機は中世キリスト教的宗教世界観の崩壊である。それ以後、世界は個人の欲望を基本とする資本主義的近代化の時代に入っている。これらの時代変遷の根本は人間の生きるという「信念体系」の変化である。「法」という規範から、「神」という信仰、そして「欲望」という感情への流れである。このように考えてみると、人間は果たして「進化」してきているのかと疑問に思う。「法」は人間の「悟性」によるものであるし、「神」は「理性」によるものであり、これらは極めて人間的である。しかし、「欲望」は果たして人間特有のものか。

（３）「盾」を「矛」にする現代の大衆

「欲望」といえばそれは主に「自由」を指すだろう。人間も動物も本能という自然のルールに従って生きている。しかし、そのルール「制約」からは少しでも自由になり、自分にとって有利なように利用したいと思っている。だが、人間は単独では弱い動物である。よって他者との協同でなければ生きられない。それゆえ自己の自由はおのずから制限せざるを得なくなるのである。過去の時代においてはこの自由の制限は「法」や「神」によって定められていた。しかし、現代においてはこの「自由」を制限する信念体

系はない。むしろ、自由は消極的に保障されているだけだ。消極的とはそれが侵害された時のみ保護されるという意味だ。それが、現代の「信仰の自由」や「表現の自由」なのである。

しかし、現代はこの消極的自由が一部の特権的勢力によって積極的自由化している。本来、自由は守られるべき道具としての「盾」であったのが、それが攻撃のための「矛」、つまり武器として使われているのである。特に顕著なのは「宗教国家」と言われているアメリカだ。例えば、この国が敵視するアフガニスタンは、女性の学ぶ権利を否定しているタリバンによって支配されているという事を理由として制裁を受けている。アメリカの現状と何が違うのか。自分との考え方、信仰の在り方が異なる人間に対するこれほどまでの不寛容は、「分断が進むアメリカ」といフレーズで国内でも同じような状況にある。また、フランスの「ライシテ」政教分離法も同じである。自由という名のもとに、本来守られるべき「自由」が暴力に晒されている。「政教分離」は、近現代の民主主義国家においては極めて重要な考え方だが、それを否定していることに等しい。トランプは「魔女狩りだ」といって自らの犯罪を免罪し、意見の異なる他者を暴力的に攻撃している。

「神を背負った人間」がどれほど恐ろしいことをやってのけるかは、ヨーロッパにおける異端裁判、宗教戦争などで歴史の中に深く刻まれている。しかし、アメリカは、「中世を持たぬ国」である。東海岸に辿り着いた移民たちは、先住民から土地を奪い、抵抗する者たちを容赦なく殺害し、南部では、アフリカから「輸入」された人びとが奴隷として酷使された。「中世を持たぬ国」という意味は、宗教対立を徐々に緩和し、「人権」という概念を様々な制度を導入し、法に依ってそれらを確固たるものとしてきた西ヨーロッパのような過程をアメリカは持っていないということだ。イギリスの植民地としてのアメリカの独立宣言は 1776 年、その後 1789 年にフランス革命が起きている。

（4）第四の危機へ

このようなアメリカで誕生した「哲学」が、「役に立つものこそ真理である」というプラグマティズムだ。この哲学の背景にはやはり欧州大陸とは異なる、アメリカ建国の歴史が大きく関係する。すなわち独立後に起きた内乱「シビルウォー」南北戦争だ。国が分断され互いに主義をめぐって戦った。その経験から、ただ一つの「真実」を求めるのではなく、その行為の「結果」が良いかどうかが真理の判定になるという「行為実用主義」が生まれたのである。この思想の背景には自然科学と宗教の対立を解決するという要請もあったようだ。そして多用なアメリカの意見をまとめ上げるという役割を果たしてきた良い面も持つ。その一つに「探求」がある。これは一つの「真実」を押し付けるのではなく、真理を追究する過程そのものが正しいという民主主義の本質を示している考えだ。しかし、現実、現在のアメリカはこうなっていない。「分断」「対立」は深刻化し、多数決による「偽の真実」が国を支配している。そして、ただ「観照」しているだけの知識人を蔑視する「反知性主義」の暴力が吹き荒れている。トランプは政治をただ自分に「役に立つ組織」としてしまった。戦後８０年、世界は「第四の危機の時代」に突入した。

大峯奥駈道（８６）

下村　嘉朗

体験型人間学　３６

不運な男・X君

生まれた時から今まで、「あほだ」「ばかだ」と言われ続けば、誰だって人と話をするのも怖くなるし、近寄りたくなくなる。こういう経験のない人には説明しにくいが、確かに事実だと思う。

彼は、ほとんど何もせずに立っている。私が、走って行き注意すると「僕は、がんばってやっています」と臆することなくけんか腰に答える。その態度をみて「こりゃあ、あかんわ」と思う。しかし、今はどうすることも出来ない。なんとか一日を無事に過ごさなければいけない。

思い余って、会社に電話し、「X君はかなり問題がある、X君をほかの人と代えてくれ」と言うのだが、会社は「何とか頑張ってやってくれ」と言う。まあ、こんなもんだろとあきらめる。しかし、現場の監督も会社にX君を代えろと文句を言っているのだが、なかなか会社は代えない。こんな状態が２０日あまり続いた日に、突然会社から「Xくんが休憩中に酒を飲んでいたと通告があり、これから交代要員を送るから、よろしく。」急な展開に驚いたが、とにかくX君がいなくなることに、一応安堵した。

しかし、自分の中では、何とも言えない複雑な気持ちが残った。私は、わりと博愛主義者で弱きものに対して優しいといつも思っていたのだが、そうではなかった。いや、X君が私の援護能力を超えてしまっていたからかもしれない。人を助けることは本当に難しい。次号に続く

同じ青春を過ごした
セツラーの想い

かつて全国の大学に学生セツルメントというサークルがありました。そのサークルに入り地域活動に参加した学生たちのことをセツラーといい、互いに「ジャリトラ」とか「サマンサ」というニックネーム（当時はセツラーネームといいました）で呼び合って交流を深め合い元気に活動していました。それから五〇年。そのセツラーたちもすでに七〇歳を過ぎ、心に残るさまざまな思い出や今語らねばという思いとから文章を寄せてくれ、一昨年にそれを本誌に掲載しました（第二〇一号）。しかし、その後、残念ながら開店休業状態となってしまい、どうしたものかと考えておりましたところ、昨年末に新たに原稿を寄せてくださる元セツラーの方がおられましたので、このコーナーを再開することにしました。なお、プライバシー保護のため可能な限りセツラー名を使用しておりますので、その点、御容赦ください。（編集担当）

医師を志して

大井通正

雑然とした街並み、古い民家、安普請の長屋、しばしば火事に見舞われる木賃アパート。当時、ばた屋と蔑まれていた廃品回収に携わる人たちの仕切り場が連なる。

高瀬川の上にベニヤ板で囲った掘っ建て小屋が並ぶ。入口に毛布が吊るしてあった。それがドア代わりだ。中に入ると窓もなく薄暗い部屋にテレビだけが煌々とついている。子供が二人座ってテレビに見入っている。小学校三年生のめいこちゃんとその妹だ。お姉ちゃんのさっちゃんは中学三年生。今は炊事か洗濯か家にいなかった。近くに共同井戸があって、そこで炊事洗濯をしている。道路まで水道管が来ているが、川の上に建てられた不法建築のバラック街に水道はない。

１９６７年秋、私は大学のサークル「底辺問題研究会」に所属し、京都の東九条地域に入りセツルメント活動に取り組んでいた。１９６０年代、日本社会は高度成長を謳歌していた。しかし貧困、差別、不健康、病気、劣悪な住環境、家族の崩壊など、当時の東九条には社会の矛盾が集中し「東九条は繁栄の幻想を許さない」状況であった。

さっちゃんたち三人姉妹のお母さんは亡くなり、お父さんは結核で入院中だった。さっちゃんが親代わりで、中学校から帰ると家事をこなし妹たちの面倒を見ていた。

私たちセツラーは京都の北にある国立の結核療養所に入院していたお父さんのお見舞いに行った。

戦前からの古い建物で、病室も殺風景で暗かった。私たちの見舞いに痩身のお父さんは「ありがとう。すまんなあ」と繰り返した。長くない、と思った。

さっちゃんは聡明な顔つきだが無口であまり感情を表に出さない子だった。これからのことを尋ねたとき、定時制高校に進学して働きながら勉強したいといった。それからは私たちが家庭教師をすることにした。目指す高校は朱雀高校定時制だ。さっちゃんはがんばった。

合格発表の日。私たちは地域に行った。雨の日だった。道路を隔てた交差点にさっちゃんはいた。私たちを見つけると、さっちゃんは、

「通ったよ」

そう言って手に持っていた水玉模様の雨傘をくるくるっと回した。

地域のなかで青年や子供たち、老人とともに私たちは何ができるだろうか。子供会活動、子供たちと遊んだり、勉強を見たり、おばちゃんたちと炊事場や便所の掃除。青年学級、識字教室、火事の救援活動、保健活動など。単なる慈善事業ではない「なにか」を模索しながら活動に取り組んでいた。活動の中でわたしたち自身が変わり成長していく、それを当時の言葉で「自己変革」と呼んでいた。東九条のセツルメント活動を通して自らの生き方に関わる大切なことを学んだように思ったがそれが何なのかそのときのわたしにはわからなかった。

当時「憲法を暮らしに生かそう」の垂れ幕が京都府庁の正面に掲げてあった。立憲国家ならあたりまえのことなのだが、そうでない現実が溢れていたから平和と民主主義を希求する府知事自らの政治姿勢として府庁に掲げていたのだ。その通りだと思ったわたしは当時の蜷川民主府政再選を目指す選挙運動に参加していた。京の町家を回って選挙ビラを手渡した。「おにいちゃんがんばってや」と声をかけてくれた路地の奥の長屋に住む孤老のまなざし。この人たちの声が届く政治を願った。

数年後わたしは薬学研究科の大学院生として動物実験に忙しい毎日を送っていた。生活費のため、なつかしい東九条にある京都民医連九条診療所で調剤業務や当直のアルバイトをしていた。診療所には毎日患者が溢れていた。ランニングシャツを着た土方仕事に出かけるおっちゃん、ひっつめ髪のおばちゃん、乳母車を歩行器代わりにした腰の曲がったばあちゃん、子供の泣き声、「看護婦さん、注射早よしてや」待合室は活気にあふれていた。この地域に暮らし働く人々にとってなくてはならない空間。それが九条診療所であった。

凍えるような冬の朝、まだ7時過ぎだというのに診療所の前は騒がしい。「おーい、早よ開けてくれ」、ああ、あのじいちゃんの声、ばあちゃんの声、アルバイト学生の私はいそいで宿直室を出る。

地域のお年寄りが生命と生きがいをたくした診療所の1日が始まる。診療所に行って、優しい先生に診てもらい、看護婦さんに手をにぎってもらって、顔なじみと話し、そして日が終わる。そんな下町の老人たちの生命と生きがいにかかわる仕事をしたい。待合室のスリッパをそろえながらぼんやりと思っていた。

ある日、わたしは診療所長の谷田悟郎先生の往診に同行した。そこで見たものは粗末なバラック小屋の板の間に横たわる脳卒中片麻痺の患者だった。谷田先生は患者の萎えた足を天井からつるした自転車のタイヤチューブに乗せ、ゆっくりと上下させる。そして患者に自分で動かすように促した。先生の背中越しに患者を見ていた私は、

「先生、これは何をしてるのですか」

「リハビリ訓練や。少しでも足が動かせるようにな」

あふれる患者を前に忙しく外来をこなす谷田先生の姿を日ごろ見慣れていた私にとってその光景は予想もしないものだった。この地域に生きる重い障害を持つ在宅患者に自分は何ができるだろうかを考えて工夫されている。私の持っていた医師像をはるかに超えた体験だった。

障害を持つ病人に尽くせる医療に携わりたい。私にとってこの体験が医師を目指そうと志を持つ原点となった。そのことを京都セツルメントのセツラーだった九条診療所の看護婦に打ち明けた。

「やってみたら」あっさりと答えた。それで勇気がわいてきた。

しかし現実は甘くなかった。修士課程を修了、27歳無職で結婚し予備校に通う身になったが、そのうち子供も生まれ保育所通い。看護婦の給料だけでは食べていけずアルバイトにも精を出した。医学部合格までの道のりは遠かった。1年のつもりが3年かかった。30歳になっていた。

セツルの思いで大阪の教育行政に携わって

中西正人（ゴエモン）

○　1970年、大学入学とセツルとの出会い

私は激動の時代と言われた70年代の幕開け、1970年に京都大学に入学しました。初めて足を踏み入れたキャンパスは自治会や様々なセクト、サークルの立て看板が乱立していましたが、その中で私の目を引いたのは「東九条は繁栄の幻想を許さない」「君もセツルメント活動の輪の中に」という底辺問題研究会でした。

高校時代に読んだ野上弥生子さんの「真知子」に出てきたセツルメントという言葉が頭の片隅に残っていたからだと思いますが、早速西部講堂の汚いサークルボックスを訪れて、そのまま入部し、セツルの一員になりました。岩本町セツルの青空パートでした。

東九条という地域の厳しい生活の現実とそこでの子供たちや青年とのふれあい、大学を超えてできた多くの友人たち、生涯のパートナーとなった妻との出会いなどセツルは私の人生にとって大きな意味を持ちました。

なかでも忘れられない言葉が「伸びる芽を育てる」です。厳しい状況にある子供たち一人ひとりのいいところ「伸びる芽」を見つけ、引き出し、しっかりと育てていこうという思いを込めたキャッチフレーズで、私がその後大阪府教育委員会での教育行政や大学での教員養成の仕事に携わる中で、一番大切にし続けた教育に対する基本スタンスとなりました。

○　黒田知事に憧れ、大阪府庁に

セツルで子供たちとかかわる活動をする中で、教師になりたいという思いが芽生えましたが、いかんせん教養部の2年間授業さえほとんど受けていない状況だったので、教職の単位が取れる見込みがなく断念、悩んだ末、住民の暮らしや子供たちの教育福祉にかかわる仕事がしたいという思いから地方公務員になることに決めました。「大阪に文化のルネッサンスを」「府政に涙とペーソスを」という黒田了一知事のスローガンに限りない魅力を感じて、大阪府を選び、府職員として39年間の公務員生活を送ることになりました。

係長時代は私学助成、課長時代は文化行政を担当しましたが、税、財政、企画、行政改革、人事など内部管理業務に携わることが多く、教育委員会とは縁がありませんでした。入庁丸30年がたって、残りの公務員生活も少なくなり、最後に教育にかかわる仕事がしたいという思いで、教育委員会への異動を希望し、教育次長として、初めて教育委員会で仕事をすることになりました。この時は「教師になりたい」という学生時代の夢が形を変えて実現したようで、本当にありがたいことだったと思っています。熱いハートを持った教員の皆さんと仕事をするのは異業種交流のようで楽しく、多くのことを学ばせていただきました。

○　橋下知事の誕生と協調

教育次長を3年間勤めた後、総務部長として知事部局に戻りましたが、この時大阪府にとっても、私個人にとっても大変なことが起こりました。「大阪府は破産

団体だ」と公言する橋下徹さんが知事に就任したのです。府庁には激震が走りましたが、私は橋下さんを暴君、破壊者にするか、改革の救世主にするかは、我々府庁職員次第、誠心誠意向き合おうと心に誓い、議論を重ねながら財政再建の取り組みを進めました。

その次に飛び出したのが、「クソ教育委員会」発言でした。教育界には不安、反発や怒りが渦巻きましたが、その状況冷めやらぬ中で、知事から教育長就任を打診されました。

この時は数日間、本当に悩みましたが、

・教員から学ぶ姿勢を持ち続けること
・学校現場の校長や市町村教育委員会とのコンセンサスを大切にすること
・「子供一人ひとりの力を伸ばす教育」のために「教育の底上げ」の視点を重視すること

の三つを肝に銘じ、公務員人生最後の仕事としてチャレンジしようと決意しました。特に三つ目は、ともすれば橋下さんの言動の中に新自由主義的、競争主義的な教育観がみられる中で、セツルで抱いていた子供一人一人の伸びる芽を育てる教育を大切にしたいという思いからでした。

橋下さんの任期前半の施策で、子供たちが経済状況にかかわらず、公立高校でも私立高校でも選択できるようにする私学の無償化は私の係長時代からの夢でしたし、家庭の状況にかかわらず、どの子もしっかりと栄養のある昼食を食べられるようにする中学校給食導入事業は私もその思いに共鳴していました。

また府民の切実な要望であった支援教育の充実については、知事が教育委員会の要望を受け止め、４校を新設するという思い切った決断をしてくれました。

こうした取り組みをやりながら、私は橋下さんと力を合わせて大阪の教育を前進させることができるのではという手応えを感じていましたが、平成２３年一斉地方選挙で維新の会が府議会単独過半数を占めるという政治情勢の変化で、状況は一変しました。

○　暗転した後半２年間―教育基本条例をめぐる攻防

府議選終了後の５月議会には、君が代の起立斉唱条例、９月議会には教育基本条例が提案されました。この条例案は知事による教育目標の設定や教育委員の罷免など教育委員会制度の根幹に関わるものをはじめ、全ての府立学校長の任期付き公募制への移行、教員評価の相対評価への移行と低評価教員の分限免職、高校の学区の全廃と３年連続定員割れ高校の廃止などびっくりするような項目のオンパレードでした。

私は記者会見で「この条例がこのまま通ったら、大阪の教育は大混乱する」と述べ、翌日の新聞では「府教育長真っ向反論」の見出しで報道されました。

それから、知事、議会与党と教育委員会が対立して激しい論戦を戦わせるという全国に例を見ない異例の事態となり、多くの教育関係者、学者、文化人からも反対の声が広がりました。

私のセツルの一年先輩で大教組の委員長をされていたブラジルとも、立場の違いを超えて、連携できたと思っています。

半年間の激しい論戦をへて、翌年３月修正された条例が成立しました。大阪の教育行政に精通した研究者は「教育基本条例をめぐる維新の会と府教委のバトルは痛み分けとでも表現してよい結果になった」というコメントをされていますが、ベストとはいえないまでも、大阪の教育にとってギリギリのところに着地できたのではないかと思っています。

この詳細な内容については、拙著「大阪の教育行政―橋下知事との相克と協調」や志水幸吉先生の「検証大阪の教育改革」（岩波ブックレット）、毎日放送斉加尚代さんの「教育と愛国」（岩波書店）に記されています。特に教育ギャラクシー賞を受賞され、映画化もされた「教育と愛国」は一読をお勧めします。

私は、翌年、教育振興基本計画の策定を最後に大阪府を退職した後、大阪教育大学、桃山学院教育大学という二つの大学で教員養成の仕事に携わりましたが、学生たちが「伸びる芽を育てる」教員として学校現場に羽ばたいていく姿を見ることができたのは、何よりの幸せでした。

○　今は亡き二人への感謝

最後に、私の京都から大阪への歩みを振り返って、忘れることのできない二人について記したいと思います。

一人は京大底辺研の一年先輩で、京セツ連の委員長をされたガクさんで、本人は我苦という字を使っていました。おおらかで朴訥、話をしているだけで心が安らぎ、怒ったり興奮した姿は記憶にありません。私が大阪府の採用試験を受けるとき、大阪には一度も行ったことがないので不安だという話をしたら、「それならうちの家から、試験を受けに行け」と言ってくれました。阪和線で天王寺の一駅南の美章園の家に泊めてもらい、採用試

験を受けたのですが、これが私の大阪での第一歩でした。

彼は卒業後、京都府庁の職員になりましたが、約２０年の歳月がたった時、突然の訃報が届きました。私は無念の思いで葬儀に参列しましたが、終了後の奥さんの喪主のあいさつに感動しました。彼女は府立高校の教員で労働組合の役員をされていましたが、悲しみの中での凛としたお姿と前を向いた力強いお話に心を打たれました。

そして数年後、平野区から府議会議員に当選され、教員の経験を活かして、教育文化常任委員として活躍されました。私は教育長として彼女の質問に答弁したこともありますが、論法鋭い彼女の質問に在りし日のガクさんに思いをはせながら、懸命の答弁をしたことは忘れられません。

もう一人は京都女子大学のセツラーのクラゲでフンマツと結婚しました。二人が結婚するときフンマツからクラゲの実家へあいさつに行くので、付き合ってくれと言われ、東京の原宿の実家へお願いに行ったのは忘れられない思い出です。

フンマツとクラゲ夫婦、私とリンゴの夫婦は１０年ほど長岡京の同じマンションで暮らしました。４人でよく一緒にお酒を飲み、そのあと麻雀をやったものです。翌朝起きると学童保育指導員のフンマツと保母のリンゴは桂の川島児童センターへ、大阪府庁の私と大阪市立盲学校の教員のクラゲは大阪に向かうというちょっと変わった面白い日々を過ごしたことが懐かしく思い出されます。このころ入りびたるように、どちらかの家に来てくれていたのがシュンです。

しかし、クラゲは５０歳を超えて、癌を発病、見事な精神力で病魔と闘い、仕事を続けましたが、６０歳の定年を前に、１１月１９日のフンマツの誕生日に力尽きたかのように亡くなりました。

その時、私は教育長になっていましたが、彼女が私に残してくれた最後の言葉は「ゴエモンがいるから、大阪の教育は決定的には悪くならないと信じている」でした。

そのあと、維新とのし烈な攻防になり、何度か絶望的な気持ちになったこともありますが、苦しいときに思い起こし、自分を奮い立たせたのはこの言葉です。

この二人をはじめ、たくさんの仲間との悲しい別れがありました。心からご冥福をお祈りするとともに、人生１００年時代、決して残り少なくないこれからの人生を、彼、彼女らと共に過ごした青春の日々を忘れずに歩みたいものだと思っています。

ボケ老人の雑記（その９）

明石　幸次郎

聴くボランティアで「友人と思っていた人に自分のしんどい悩みを聴いて貰って、少しはモヤモヤを晴らしたいと思って電話して色々と内輪話をしたら、友人から返ってきた答えは貴方のやり方が悪い、自分にとってマイナスになることは、きっぱりと関係を切ってしまえば良いのにと言われて、逆にこころのモヤモヤが大きくなり、どうしたらよいものかと電話しました」という６０代の女性からの電話を聴きました。

金使いが荒く、サラ金に借金までして風俗に通う夫のこと、兄弟の心の病、母親の認知症とその介護のことなど次々と自分の身の回りに起きているしんどい事に押しつぶされそうになっている状況を話されました。この苦しい彼女の胸の内を口を挟まずに聴いていたら、身内に起こっているしんどい事よりも、友人と思っていた人に大変やねと共感を持って聴いて貰えず、逆に自分のやり方が甘いとか、夫とは直ぐに離婚したら良い、家族とも距離を置いたら良いとかで、自分の対応が良くないとかで、自分の夫、家族への想い、気持ちを全面的に否定されたことがショックであったようであった。

彼女のように世の中、家族のみならず、しんどい職場の人間関係を抱えて悩み、苦しんで、もがいている人が沢山いると思われますが、中々、彼女の友人が言うように、「あんさん、別れなはれ、距離をおきなはれ、自分の方が大事やで、自分ファーストよー」というように、きっぱりと人間関係を断つことや距離をおくことなどと言われても本人は納得がいかないものです。そう簡単には解決策は見出しにくいもので、仕方なく悩みを抱えながら、それでも人は死なずに生きていかざるものであります。

この様なしんどい話は、出来るだけ相手に言うだけ言ってもらい、それを聞き出し、自分の意見は言わずに、又、裁かず、排除しないで、悩んでいる人に寄り添い、共感する気持ちを持ちながら「大変やね、貴女のしんどい気持ちは分かる」と言って、相手に関心を寄せるということの方が大切なことだと思われます。

良き隣人たることは、社会の「正しさ」に入りきれない、弱さ・苦しさ・不自由さを抱える人の声を聴くことで、決して自分の価値観、考え、思いだけで、相手に何が正しいとか、問題解決策のようなことを伝えるのではないですね。相手の

話を丸ごと受け止めて聴くことで、その人の存在を認め、関心を持ち、それでその人気持ちに何かの変化が起こってくるのを待つ、耐えるという姿勢が大事であると思います。

じっと、30分程、この女性の話しを邪魔にならない程度の相槌を入れ、「そうですね、しんどいですね」と共感しながら聴きていましたら、段々と沈んでいた声が元気になり、「私は３０年ほど前に夫のＤＶで悩んでいた時に別の友人からここのような電話相談があるよ、と教えてもらい、それ以来、何かあれば電話をさせてもらってます。今日も電話させてもらい、良かったと思います」と言われ、後は「昨日、ホームレスのような人が、おにぎりをおいしそうに食べてたところに出会わせ、何かしら、ほっとしたような感じになりました」というような他者に想いを至らすような気持になったようなことを言われたので、あれ、この人の気持ちの変化が表れたのを感じて、「そうですね。自分だけではなく、他人にも貴女が感じた気持ちを持つことは大切なことだと思います。又、しんどい事があれば、いつでも電話して下さいよ。一人でしんどい事を抱えたらだめですよ」と電話を終えました。久しぶりに何かしらこちらの気持ちもほっとした電話でありました。

オクラの山たより（１００）

困了生

一

樋口一葉の残した資料からすると最も早いものは一八八九（明治二十二）年、雑記帳の中に書かれた政治小説風の短い断片と平岡という未亡人の月琴教授の稽古場で弟子の海上仲子と石原が来合わせる場面を描いた断片です。このとき一葉は十七歳。歌塾の萩の舎に入ってすでに三年がたっており、この年の七月に父則義が亡くなっています。前年（明治二十一年）の六月に萩の舎でともに学んだ田辺花圃の「藪の鶯」が発表された一年後あたりから断片的に小説らしきものを書き散らすことを始めていたようです。しかし、当時の感想が「小説などかくもよけれど若き人はそれも又面起こす業にもあらず」と雑記帳に書かれていて、まだ職業として自ら書く意思はなかったようです。本格的に小説を書こうと一葉が考えたのは一八九〇（明治二十三）年九月、次兄の虎之助の家に一家が同居するのをやめて本郷菊坂町七十番地に母たき、妹邦子とともに転居し女性三人でもっぱら裁縫や洗濯によって生計を立てるという生活がいよいよ苦しくなっていった一八九一（明治二十四）年一月頃のことです。

小説の書き方、発表の方法などに悩んでいると思わぬところから道が開けました。妹の友人である東京府立高等女学校生徒の野々宮菊子によって半井桃水を紹介されます。

樋口家は仕立物の賃仕事もしており、一葉も自分が通う萩の舎の師である中島歌子やその門人から多くの注文を受けていました。妹の邦子も注文主を探していたのでしょう。その注文主の斡旋を邦子から野々宮菊子を頼まれ、菊子は女学校で同級の友人であった妹幸子や鶴田たみ子（半井家に同居していた）の半井桃水家を邦子に紹介しました。半井桃水は若い頃に妻を失って独身であり、多くの弟妹をかかえ、さらには二人の書生や鶴田たみ子という同居人までかかえて仕立物等をする人もなく桃水はさっそく樋口家に頼むということになりました。

たぶんですが、何回か半井家に通っているあいだに一葉は桃水が新聞記者であり、流行作家でもあることを知ったのでしょう。作家の後ろ盾があり、しかも出版関係にも顔がきくということは一葉にとって願ってもないことでした。すでに数年前に「藪の鶯」を出版したあとも「八重桜」という評判の高い作品を発表していました。こうした活躍の背後には「藪の鶯」の序文を坪内逍遙と福地源一郎が書いているように田辺花穂には当時の文学界の大きなバックアップがありました。特に坪内逍遙の力添えがあれば出版までの道筋は比較的容易だったはずです。一葉はまず樋口家の生活を支えるために、一家の生活のために作家にならなければなりませんでした。同門の女性で歌の才能では自分と等しい評価を中島歌子から受けていた田辺花穂に坪内逍遙という存在があって作家となり得たならば、自分にもそのような存在が必要だと一葉が考えたのは当然のことです。一八九一（明治二十四）年四月十五日、野々宮菊子が紹介の労をとり、二十歳の一葉は三十二歳の半井桃水に初めて会いました。

半井桃水は対馬の宗家に仕えた典医の子であり、東京朝日の新聞記者であり朝日に毎回絵入り大衆小説を連載しているという流行作家でもありました。初対面であった桃水にあったときの一葉自身の様子を彼女は次のように日記に書いています。

（桃水は）初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかかることならはねば、耳ほてり唇かはきていふべき言もおぼえず。のぶべき言もなくて、ひたぶるに礼をなすのみなりき。

（「若葉かげ」　明治二十四年四月十五日）

どこか初々しいと思えるくらいの一葉の様子です。ただし一葉の日記には文飾があちこちにありますから、この通りであったかどうかは分かりません。これに対

して桃水の見た一葉の様子は次のようであったと桃水自身が一九〇七（明治四〇）年六月刊の「中央公論」に掲載されていますので、一部を引用します。

樋口夏子さん、袷を着ておられましたが、縞がらと言ひ、色合いと言ひ非常に年寄りめいて帯もそれに適当な好み、頭の銀杏返しも余り濃くない地毛ばかりで、小さく根下りに結った上、飾りといふものが更にないから大層淋しく見えました。どちらかと言へば低い身であるのに少しく背をかがめ、色艶のよくない顔にできるだけの愛嬌を作って、静粛に進み入り、三つ指でかしこまってろくろく顔を上げず、肩で二つ三つ呼吸をして、低音ながらはっきりした言葉使ひ、慇懃な挨拶ももちろん遊ばせ尽くし、昔の御殿女中がお使いに来たやうな有様で、万に一つも生意気と思はれましまいか、どうしたら女らしく見えるかと、それのみ心を砕かれるやうでありました。

「一葉女史」から

作家の目は鋭いものだなと感じさせる桃水の記述ですが、初対面の桃水に対する一葉の様子がよく分かります。

こうして半井桃水との間に師弟関係ができていき一葉は書きあげた作品を持って半井宅を訪れることが多くなっていきました。本格的な作家への修業の始まりです。

二

樋口一葉が作家を目指すきっかけとなった田辺花圃の「藪の鶯」とはどのような作品だったのでしょうか。「藪の鶯」には令嬢と呼ばれるにふさわしい階層の女学生たちが現れて、それぞれのタイプに見合った結婚をするまでが描かれています。特にしっかりと描かれているのが浅薄な西洋かぶれの女学生篠原浜子と没落した家を弟に再興させるために自分の身を犠牲にしている松島秀子です。軽薄な欧化主義をふりまく浜子は西洋流の交際の自由を勝手に取り違え結局つまらない男にだまされて不幸な結婚をして不幸となってしまう一方で古い儒教思想を堅持して和歌もたしなんだ秀子は幸福な結婚をするという小説の結末です。これをみると、この作品の持つ価値観は根っこのところでかなり保守的なものであり、作者のそれもそうであることをうかがわせます。しかし、そんなことよりもこの作品の最も興味あふれる点は作品の中に鹿鳴館時代（一八八〇～九〇年代の欧化主義の時代のことを言います）の女学生たちの風俗や彼女らの間で交わされる会話にあります。

たとえば、「藪の鶯」の冒頭を紹介すると次の通りです。

男「アハヽヽヽ。此のツー、レデースは。パアトナア計（ばかり）お好で僕なんぞとをどっては。夜会に来たやうなお心持ちが遊ばさぬといふのだから。

甲女「うそ。うそばかり。さうぢあム（こざ）り升（ませ）んけれども。あなたとをどるとやたらにお引張り回し遊ばすものですから……あの目が回るようでムりますんで。其おことわりを申上たのですワ。

男「まだワルツがきまりませんなら願ひませうか。

ときれいにかざりたるプロブレムを出して名を書きつける。

ここで描かれている場面は鹿鳴館の新年舞踏会です。男の申し出を断った令嬢の容姿は髪にバラの花かんざしをつけ、ピンク色で琥珀の着慣れた洋服を着た胸のあたりを「折々赤きふさの下がりたる扇子」であおいでいるというと描かれています。この令嬢にむかってもう一人の令嬢が「私くしは宅にいてくださくさしても。ここへまいりますと。急に気がアクチブになりますよ。あの西洋じゃア踏舞をしない人を。ウォールフラワア（かべの花）と申していやしめますとサ」という具合に英語まじりの言葉をかけています。この会話のやりとりはいかにも鹿鳴館時代の女学生らしい風俗といえます。このような女学生たちが女子寮の一室に集まっておしゃべりに興じている場面にもそれはよく出ています。

斎藤「ですがネー。わたくしは夕べおかしな夢を見てヨ……。

女「ヨー斎藤さんもうおよしなさいヨ。サア」トかすていらをペンナイフで切って出す。「メネーメネー。サンキュー。ホワ。ユウワ。カインド」と片言の英語をさいずりながらチョイとつまんで……

と会話のところどころで英語を使うことや「～してみてよ」「よくってよ」という言い回しをすることは女学生言葉として当時流行していました。

蛇足ですが引用した部分にある「メネー」は「many」「ホワ」は「how」のことで、「メネー……」でいいたい英語は「Many many thank you. How you are kind.」だと想像されます。英語としては変に感じますが、「片言の英語」と文中にありますから、作者の工夫による表現でしょう。

この「藪の鶯」に描かれた女学生たちの生態を田辺花圃は明治女学校・東京高等女学校（創立は一八八二年。後のお茶の水女子大学付属中学校・高校）に学んだ体験から得たのでしょう。この女学校では田辺花圃は東京高等女学校の様子を次のように回想しています。

当時のお茶の水(東京高等女学校)は所謂欧化主義の全盛期でございましたから、女学生の風俗も束髪に洋装といふハイカラな格好で土曜日の午後には和楽会と申しまして学校の中でダンスの会が開かれておりました。この和楽会は男女交際の道を開くとでも申しませうか、……大学の先生方がよくダンスをしにおいでになりました。また……海軍の軍人さんも大勢お見えになっていたゐたやうでございます。土曜日の午後になりますと、さすがに女学生の方でもそはそはする様子が見えました。なかには理容室へ行って一寸白粉をつける女学生もございました。

これを読むと「薮の鶯」の冒頭の場面が土曜日ごとに女学校では繰り広げていたように思えます。ただし、先ほども述べたように田辺花圃はこうした時代の先端を行く欧化風俗の中に置かれながらも、それに対して批判的な目を持っていました。繰り返しになりますが、「薮の鶯」の中で田辺花圃は自分の分身ともいえる女学生を登場させて次のように語らせています。

女にもしも学問をさせなければ、中々善良の母も出来ますまいし、学問をさせれば厚顔な押しのつよい女が出来ますから、何でも一つの専門を定めて、それをよく勉強して、人に高ぶり生意気の出ないやうにして、温順な女徳を損じないやうにしなければなりません。

と欧化主義教育の行き過ぎを批判させています。今から見れば「何を言っているの。冗談じゃないわよ」と批判続出するかに見えるこの考えが田辺花圃の女子教育観であり、欧化主義批判が世に強く出てきた時代に生きた人であり致し方のないことですが、彼女の作品が今日ほとんど顧みられない原因でしょう。つまり、「薮之鶯」に限らず、総じて花圃の作品の特徴は強烈な自己主張と教訓を戯作調の文体に盛って世の女性に「温順な女徳」を説くところにあり、これがやがて後進の一葉に差をつけられた理由であると多くの日本近代文学研究者は指摘しています。

「温順な女徳」を強調したとおり田辺花圃は「薮の鶯」で文名をあげてから四年後に国粋主義者の三宅雪嶺と結婚し三宅花圃となりました。

三

現在から見れば明治二〇年代で輝いている女性の作家はなんといっても樋口一葉ですが、一葉が小説を書こうとしていた当時もてはやされたのは一葉に先行した田辺花圃や「婦女之鑑」の作者木村曙であり、彼女らは富裕な家庭に育ち、女学校などで学び外国語を初めとして欧風の文化を一定であれ身につけた人たちでした。小学校を中退した一葉には外国語をはじめとして女学校で学習する教養はありませんでした。あるのは幼いころからの読書で身につけた江戸文学を中心にした知識と萩の舎で学んだ和歌を中心にした日本古典の知識でした。「薮の鶯」を読んだとき、一葉はおそらくこのような小説は書けないと考えたに違いありません。半井桃水に師事するようになる前の習作といえる作品には会話体が多い構成などに「薮の鶯」の影響は確かに見られますが、作品として完成されたものはありません。では、どうするか。自分が慣れ親しんだ和文体、つまり、平安時代の女性たちが平仮名を使って書いた物語や日記の文体で書く、物語の大枠は古典の中からヒントを得て書いて行くことから一葉は始めていきます。桃水の指導を受けた上で完成し発表された一葉の文壇デビュー作「闇桜」の冒頭は

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて、汲みかはす庭井（にわい）の水の交わりの底きよく深く、軒端に咲く梅の一木（ひとき）に両家の春を見せて、薫りも分かち合ふ中村、園田と呼ぶ宿あり。

となっており、「薮の鶯」とはまったく違った文体です。そして、この部分だけからも「伊勢物語」の筒井筒の話をヒントに書いていることが察せられます。

ただし、ここで大急ぎで一言すべきなのは、一葉は王朝風の作品から小説を書き始めたわけではないということです。一葉の研究者である菅聡子さんによれば、一葉が断片的なものではなく初めて小説の習作をまともに試みたのは一八九〇（明治二十三）年の四月から七月であるとされています。巻紙に書かれた草稿には母と兄と助け合いながら貧しい生活を支えている主人公のお八重という十六歳の少女が「博覧会みて様なかん工場（勧工場のことで明治十年に終わった博覧会の売れ残りの品を販売したのが始まり。一つの建物に各種商店を集めて商品を陳列した今のスーパーマーケットの前身といえる。博覧会の会場内にさまざまな商品を売る「勧工場」のような売り場ができていたらしい）」で売り子として働こうという決意を家族に告げている場面が描かれています。その一部を示します。なお、会話文の上にある（　）は筆者が書き加えたものです。

（お八重）「今度上野へ何とかいひましたつけ、何でも博覧会みて様な勧工場のやうなものが出来まして、それのマア売り子ですねへ。十五位から廿五六までの女をほしいといふの。そして給料は一番下等で一日七銭（今の一七五〇円ほど）ですとさ。そ

れから廿銭まで有るといふの。……」

（兄）「……最下等が七銭といったら七銭を目安にしなくちや。当て事といふものは多くはずれやすいから、それよりも第一はそんな多人数に顔をさらすのもあんまりお前気の毒でねへ。……。

（お八重）「人中へ顔を出さないかつてのいふは昔の事ですわ。ましてわたしらなんざ何かまふことが有りますもんか、いくらでもお金の取れることをして早くよくなる工夫をすのですもの。それに最下等の七銭よりほか取れないだらふといふこともなかろうかとわたしや思ひますわ。何でもこれまでといふ制限があることでもそのきまりよりうへに上がりたいのよ。……兄さんどうぞ出して頂戴な」

「闇桜」の浪漫的ともいえる文章とはまったく異質な描き方がされています。勧工場の売り子の一日の賃金が最高でも五千円くらいであったことを伝えているなどかなりリアルな書きぶりです。これが一葉の小説への第一歩でした。「博覧会」とあるのは明治二十三年に上野公園で開催された第三回内国勧業博覧会のことです。注目したいのはこの内国博覧会に設けられた勧工場に売り子として勤める女性が一葉の身近にもいたということです。それは一葉の日記に「おのれは図書館にふみ見んとて早う出ぬ。道にて今野はるの商品陳列館に出勤するに逢て、伴ひて行く。」（「蓬生（よもぎふ）日記　一」明治24・9・26）という記述があり、小説に描かれたお八重の決意が決して空想のものではなく、実際に博覧会に関係する場所で働いていた女性たちがいたことをこの記述は私たちに伝えてくれます。また、すでに何度か見てきたようにお八重と同じく一家の生活のために一生懸命に働く少女の姿は一葉自身あるいは妹の邦子の姿をも投影していることは明らかです。先ほど紹介した文壇デビュー作「闇桜」ではロマンチックな王朝物語風の作品を書いていた一葉ですが、最初の習作がリアルな世俗的な世界を描くところから始まっていることは記憶にとどめていいことである、と菅聡子さんは主張しています。

【　補足　】

◇　女性の作家の先駆者と木村曙

女性の作家を指す言葉として「女流作家」という言葉がかつてありました。しかし、女性の作家に対して男性の作家という「対」になる言葉がありますが、男流作家という言葉はありません。このことは女流作家には「作家」とは本来男性の職業であって、女性がそれを行うことは特別なことなのだ、女性がものを書くことに携わることは例外的なことだ、という解釈が一般的にあったということを指しています。ですから明治初年というまだ女性に対する縛りの強い時代にあって女性がものを書こうとしたときにはかなりの圧力がかかりました。そのため女性の書き手たちは、まず女権拡張運動からその第一歩をはじめることとなりました。その代表は岸田俊子（1863～1901　結婚後は中島湘煙）と清水紫琴（1868～1933）です。

岸田俊子は戦略的に「文金高島田、緋縮緬の着物に黒縮緬」という濃艶な姿で聴衆の前に現れ涼やかな声で女性の権利拡張を訴えました。一八八四（明治十七）年に発表された評論「同胞姉妹に告ぐ」の冒頭は「吾が親しき愛（うつく）しき姉よ妹よ何とて斯くは心なきぞ。などかく精神（たましい）の麻痺（しび）れたるぞ」という力強い言葉で始められ俊子の演説ぶりを彷彿とさせます。結婚後は中島湘煙の名前で女性の権利や教育についての多くの評論や小説を書きました。

清水紫琴もまた女権利拡張論者として出発しました。日本最初の女性のための雑誌「女学雑誌」の主筆記者として活躍した彼女には「泣いて愛する姉妹に告ぐ」（明治二十三年十月）「当今女学生の覚悟如何」（明治二十三年十一月）を発表して檄を飛ばし、女学生たちの目覚めを呼びかけています。

当今我が国の女学生幾万、しかしてその中将来の改革者をもって自ら任じ、他日の先導者をもって自ら期するもの幾人かある。……世上の女学生諸嬢に告ぐ。諸嬢の前途や実に遼遠、しかして日本今日の状態たる実に困難、家裡におゐても、夫婦間におゐても、改むべきもの、変ふべきもの一二にして止まらず。いはんや二千万姉妹と二千万兄弟との間における関係をや。しかしてこれを改めこれを実行するの責に当るべきもの、女学生諸嬢を措きてそれ誰ぞや。

「当今女学生の覚悟如何」より

女学生が学校で学んだ新しい知識や精神を、この現実の世界で実行することは実に困難だが、それを実現するのは女学生自らの覚悟以外にはないのだ。諸嬢よ、心してかかれ、という気合いのこもった紫琴の言葉は百三十年以上たった今でもまったく色あせてはいません。一葉が小説を書こうとしていた時代にはこうした空気も流れていたのです。なお、清水紫琴は後に古在由直（農芸化学者で東大総長にもなった人物。足尾銅山の鉱毒が銅であることを立証したことで知られています）と結婚しますが、結婚後も評論や小説の発表は続

けています。

樋口一葉に先行する女性作家を田辺花圃以外に一人紹介します。それは木村曙（1872～1890　本名は岡本栄子）です。彼女は牛鍋チェーン店「いろは」の経営者木村荘平とその愛人（のちに正妻）岡本政の娘として生まれました。田辺花圃も学んだ東京高等女学校在学中にヨーロッパで刺繍を学びたいと思いフランス語に熱中し、フランス留学を願いますが、父親が許さず、母とともに「いろは」の支店の経営を携わります。好意を寄せてくれた男性との結婚も許されず、父の命じた男性と結婚しますが、婿の不品行が明るみに出て離婚。仕事の合間に書き上げた「婦女之鑑」が大評判になりました。その後、次々と作品を発表しましたが、風邪をこじらせて十八歳で亡くなりました。父親に多くの愛人がいたために異母の兄弟・姉妹が数多くいます。

「婦女之鑑」は才色兼備の女学生吉川秀子が同性からの嫉妬やそれによる両親の誤解などの困難を乗り越えて友情に支えられながらケンブリッジ女子部に留学し、さらにアメリカに渡ってニューヨークの工場で手芸技術を学んで日本に帰国し工場を建てて社会事業にも乗り出す、という物語です。

これだけ聞けば「十七歳の娘が描いた少女マンガの世界だ」と笑われそうですが、ここには女学校卒業後に木村曙が果たし得なかった夢が詰まっています。そして、それは開明的な欧化主義の女子教育を受けた明治最初の世代の女学生たちが等しく持った未来の可能性への夢だったのではないでしょうか。しかし、その夢の実現には紫琴の言葉にあるとおりかなりの困難がその前に立ちはだかっていました。

女性が海外留学をしたのは明治四年に津田梅子らが米国に留学したときが最初です。それ以後、明治二十三年に私費留学した内田政子の例もありますが、それはきわめて稀なことであり、明治三十年代に入るまで女子の留学生はほぼ途絶えることになります。

隠された歴史（７５）

満田　正賢

欽明紀は日本書紀の中で最も難解な巻です。欽明紀の大半は百済との交流関係を中心とした朝鮮半島記事が占めています。そして、少ない近畿の記事の中では、むしろ蘇我稲目の方が存在感をもっています。欽明天皇自体は幼名も年齢も不詳であり、即位にまつわる記事の中には不可思議な点が多く存在しています。

私は、「隠された歴史（７３）」（７４）」で、「欽明紀の仏教伝来記事と敏達紀の仏教伝来記事の関係は、日本霊異記の説話（の元資料）を介して考察することによって解明できる。欽明王朝の仏教伝来記事は、本来敏達期の出来事として記されたものであり、それが日本書紀の編者の手によって欽明紀に模倣されて記されたことが明らかになった。」と結論付けました。欽明紀の大部分を占める朝鮮半島関連記事が百済本記と後期九州王朝の記事によって作られ、仏教伝来記事が敏達期の説話の模倣であるとすると、残された記事の分析が出来れば、欽明紀がどのようにして作られたかの全容が解明できると考えます。そこで、欽明紀の残された記事の分析を試みました。今回は欽明紀の記事を拾い出して、その一つ一つの記事が持っている意味について分析していきたいと思います。

その前に、欽明紀を分析する上で拠り所となるとなる、後期九州王朝と欽明王朝の概念を再度取りまとめておきます。

① 後期九州王朝について

日本書紀に描かれた、継体による磐井の乱、安閑による全国屯倉の設置、宣化による那津官家設置の記事は、倭の五王に連なる倭国王朝（前期九州王朝）を近畿勢力の王となった継体が倒し、倭国王の地位を奪い取った一連の史実を反映していると考えます。そして、日本書紀は、新しい倭国王朝（後期九州王朝）が那津官家を都とし倭京（大宰府）建設に進んでいったという史実を、前期九州王朝の歴史とともに隠蔽していると考えます。

古事記によれば宣化の嫡男は倉之若江王ですが、日本書紀ではそれが倉稚綾媛皇女という名の皇女に置換えられています。日本書紀は、宣化の嫡男の存在を抹殺することによって、後期九州王朝の存在自体を消し去ったと考えられます。

② 欽明王朝について

欽明王朝は、蘇我馬子が「天皇記」「国記」を編纂した際に、歴史を粉飾して創作した架空の王朝であると考えます。蘇我馬子が創作した架空の欽明王朝は、欽明の後の敏達期において、はじめて蘇我氏が牛耳る近畿における地方政権として機能するようになり、独自の史書に記され始めたと考えられます。蘇我稲目が大臣になったのは宣化期であり、欽明紀の蘇我稲目の行状は後期九州王朝の臣下としての行状が記されています。一方、蘇我馬子が大臣となったのは敏達期であり、この時期に近畿に残った勢力の独自の行状が記され始めたと考えます。

山崎仁礼男氏の『蘇我王国論』（三一書房）によれば、欽明王朝は推古で終わります。日本書紀は、敏達の最初の皇后を息長真手王の娘広姫とし、その

子の押坂彦人大兄を皇太子とすることによって、押坂彦人大兄の子の舒明を天皇に仕立て、その子である天智、天武の正統性を主張しました。即ち蘇我馬子が創作した欽明王朝の系図を利用しました。しかし実態は、推古の後、蘇我氏が天皇としてふるまい、乙巳の変で後期九州王朝（及びそれを支持する勢力）に滅ぼされたと考えられます。

それでは欽明紀に挿入された記事を紹介していきます。訳文は原本現代訳日本書紀（山田宗睦訳）を使用しました。

一．秦大津父（はたのおおつち）の記事

[欽明]天皇の幼時、夢のなかに人があらわれ、『天皇が、秦大津父（はだのおおつち）という者を寵愛すれば、大人になって、かならず天下を[保]有するでしょう』といった。おどろいてめざめ使を遣ってあまねくさがし求め、山背の紀郡の深草（京都市伏見区稲荷町辺）の里から[みつけることが]できた。姓字ははたして夢に見たとおりだった。そこでよろこびが身にあふれ、いままでみたこともない夢だと感じいった。話しかけて、『汝はなにかあったか』といった。答えて、『ありません。ただ臣が伊勢に出かけ、商売をしてもどってくると、山で闘いあって血まみれの二狼に出あいました。すぐに馬を下り口や手を洗いすすぎ、請い願って、『汝は貴神であって、荒あらしい行[為]を好む。もし猟師に出あったなら、獲られるのがもっと早いだろう』といいました。そして闘いあうのをおしとどめ、血まみれの毛を拭い洗って、放してやりました。[二匹]とも命を全うさせました。』といった。天皇は『きっとこの報いだったのだ』といった。[大津父を]近侍させ、日に日になにものにもまさって寵[愛]した。大いに富んだ。践祚してから、大蔵省に任命した。

日本書紀によれは、欽明は継体天皇と手白香皇后の嫡男で、生まれたときから次期天皇を約束されていたはずです。秦大津父を寵愛しなければ天下を保有できないような環境ではありません。この記事が何らかの伝承に基づくものでなければ、日本書紀がこのような意味不明な記事を載せるはずがありません。

それではこの伝承は、近畿天皇家に伝わるものでしょうか、それとも秦氏に伝わるものでしょうか。私は秦氏に伝わる伝承であったと考えます。その理由は、欽明紀には他にほとんど欽明自身の言動に関する記事がないからです。秦氏はこの伝承を提出することによって、自分たちの祖先が欽明王朝の発展に寄与したことを伝えたかったものと考えます。二匹の狼の説話は、欽明朝と安閑・宣化朝が並立していたという喜田貞吉氏などの「二朝並立論」を裏付ける記述であるという解釈があります。しかし、「二朝並立論」はあくまで欽明が正当な継体王朝の後継者であるということを前提としています。秦大津父の伝承は、欽明が秦氏の財力を借りなければ支配者になれなかった一豪族の状況を示しているように思われます。

私が「隠された歴史（２２）（２３）」で考察したように、欽明が継体の嫡男ではなく、実際には筑紫に遷都した宣化の嫡男（後期九州王朝）に対して、近畿に残った安閑の子だったとすると、この記事はがぜん真実味を増してきます。欽明（＊実態としては欽明を担いだ近畿諸豪族の集合体）は、深草と伊勢の間を馬に乗って商業活動していた秦大津父の財力を借りて、実力を貯えていったのではないでしょうか。

二．大伴金村の処遇に関する記事

元年、九月五日、難波の祝津（はふりつ）の宮に[行]幸した。大伴大連金村、許勢臣稲持、物部大連尾輿らが従った。天皇は諸臣に問うて、「どれほどの兵力なら、新羅を伐つことができるか」といった。物部大連尾輿らが奏して、少しばかりの兵力では、たやすく征つことはできない。さきに、オオド[継体]天皇の六年に、百済が遣使して、任那の上哆唎（おこしたり）、下（あろし）哆唎、娑陀（さだ）、牟婁（むろ）の四県を[上]表して請いました。大伴大連金村は、すぐ表の請いのとおりに、求むるところを許し賜いました。これによって、新羅の怨みは多年です。かるがるしく[新羅を]伐つべきではありません」といった。ここに大伴大連金村は[退いて]住吉（すみのえ）の宅に居て、病と称して、朝[廷]にでなかった。天皇は青海夫人勾子（あおみのおおとじまがりこ）を遣わして、ねんごろに慰問した。大連はかしこみ謝して、「臣が病むところは、余事ではありません。いま諸臣らは、臣が任那を滅ぼしたといいます。それで、おそれて朝[参]しないだけです」といった。そして鞍をつけた馬を使[の夫人]に贈って、手厚く[表]敬した。青海夫人は、あるがままにはっきりと奏した。詔して、「久しく忠誠をつくした。衆（ひと）の口など心配するな」といった。あげく罪とすることなく、いよいよ深く優遇した。

この記事は、欽明紀の朝鮮半島記事の立場と異なり、百済と倭国王の蜜月的な関係に批判的なニュアンスをもっています。敏達紀の日羅記事と同様のニュアンスを感じます。（隠された歴史（１９）参照。）朝鮮半島記事が百済本記と後期九州王朝の史書に依拠していると考えると、この記事は、それに反発する立場の人間によって、後から挿入された記事ではないかと思われます。

但し、大伴金村が住吉の宅に隠居し、

それを天皇（九州王朝の天子）が青海夫人勾子を派遣して慰問したという部分については、大伴氏に伝わる家伝を採用したものと考えることが出来るのではないでしょうか。

三、大伴狭手彦の高麗戦利品の記事

欽明二十三年、八月、天皇は大将軍大伴連狭手彦を遣わし、兵数万をひきいて、高麗を伐った。狭手彦は、百済の計を用いて、高麗を打ち破った。その王は、塀をこえて逃げた。狭手彦は、ついに勝に乗じて宮に入り、ことごとく珍宝、財貨、七織の帳（とばり）、鉄屋を手中にして、もどってきた。（旧本はいう、鉄屋は高麗の西の高楼の上に在った。織帳は高麗の王の内寝（うちとの）に張られていた。）七織の帳を天皇に献じ奉った。甲（よろい）二領（りょう）、金飾の刀二口、彫刻した青銅の鐘三口、五色の幡二竿、美人の媛（媛は名である。）とその侍女吾田子を、蘇我稲目宿禰大臣に送った。大臣は、けっきょく二女を納れて、妻とし、「軽橿原市大軽町辺」の曲の殿に居た。（鉄屋は長安寺に在る。この寺がどの国に在るかはわからない。一本はいう、十一年、大伴狭手彦連は、百済国と共に、高麗王の陽香を比津留都（ひしるつ）においはらった。）

宣化紀によれば、大伴狭手彦は宣化二年（五三七）に任那に派遣され「任那を鎮め、加えて百済を済って」います。欽明二十三年（五六二）はこの時から二十五年後です。大伴狭手彦が倭国に戻り再度半島に渡ったとしても、二十五年は開きすぎではないでしょうか。日本古典文学大系日本書紀（岩波書店）は、「このころはすでに新羅が漢城、南平壌の地を領有していて、海路以外に高句麗に侵攻する途はないから、あるいは下の分注の一本に十一年とあるのが、正しいかもしれない」という注をつけています。

蘇我稲目は宣化期に初めて大臣に登用されています。蘇我稲目が大伴狭手彦から高句麗からの戦利品をもらった記事は蘇我氏に残る家伝をもとに記述されたことが考えられます。つまり、後期九州王朝の臣下たる大伴狭手彦が百済とともに高句麗を攻撃し、戦利品を持ち帰り、蘇我稲目に分け与えたという史実の反映であろうと思われます。

この記事は、一本にあるように欽明十一年（五五〇）に起こった出来事であるか、又は、宣化二年（五三七）の出来事であるか、という二つの可能性を示していると考えます。どちらの場合も、大伴狭手彦と蘇我稲目が、後期九州王朝の臣下として繋がっていたと考えられます。

俳句

影山　武司

冬星座水尾の交はる屋形船
掻き抱く煙の逃げて小六月
年の市笑顔弾くる手打かな
歌合戦聞くともなしに晦日蕎麦
天地の音なく開く初日かな
初富士や駿河の海を風渡り
初空へ窓開け放つ朝かな
初凧や風の鳴る空駆け上がり
初凧の富士と高さを競ひをり
吊るされて紙背延びたる初暦

編集後記

ＳＫ生

▲新しい年が始まった。今年はどういう一年になるのか。不安は残るのだが、まずは未来に希望が持てる年になってほしい。昨年をあらわす漢字は「金」であった。自民党の裏金問題、物価の上昇で金に苦しむ多くの人々。確かに金にまつわる話の多い一年であった。▲イギリスのオックスフォード大学の出版部といえば、かのＯ・Ｅ・Ｄ（Oxford English Dictionary）も出している権威あふれる出版社だが、24年を表す言葉として「Brain rot（脳腐れ）」を選んだという。出版局の定義によれば「ある人物の精神、あるいは知性の状態が劣化したと思われる様子。特に、つまらない、あるいは頭を使わない（オンライン）コンテンツの過剰消費の結果と見なされるもの」がその定義だそうだ。▲去年のいくつかの選挙の状況で私たちはネットと選挙の関係について否応なく考えさせられたのだが、「脳腐れ」はイギリスだけではなく、日本でもすでに日常化しているのかもしれない。ウソも１００回言えば本当になる、といったのはナチスの宣伝相ゲッペルスだが、ネット上では無数のフェイクニュースが氾濫している。半信半疑であってもくり返し見聞きしている間に信じてしまう。人は信じたいことを信じるもの。そのままズルズルいけば「脳腐れ」状態である。▲この「脳腐れ」から抜け出すには少しずつであれ足元から徐々に信ずるにたるものを積み上げていくほかはあるまい。資本主義の劣化ともいわれる新自由主義が横行し自己責任が声高に叫ばれて精神がひたすら萎縮していく一方の世の中ではあるが、「芥川だより」がその一助になれればと願っている。

連載 ふみの道草（79）　山椒魚

応募川柳誌上句会の選評①

頼まれて三月前から標記のようなことを始めた。六ヶ月の約束で、報酬は発表誌呈のみ。三百数十名の応募者が全国から課題吟と自由雑詠吟に二句ずつ投句してくる。選者は五名いてそれぞれが、各領域から特選一句、秀作三句を選び簡単な選評を添える。そのほかに佳作を六〇句選出し、川柳誌上に一堂に発表するのである。

「こいつはこんな句をこんな理由で特選に選んだのか」は（きっと応募した読者はそう思ってみるはずだろう）、一目瞭然。五人の選者の選の結果が一致するのは、当然のことのように極めてまれである。この川柳誌を読む読者が何百人、何千人いるかは知らないが、選者としては我が身を白日の下に晒しているような妙な気持にもなる。しかし、エイッとばかりにこの選を、二日ばかりで片付けることにした。以下、後追いのような私の選評への道草にお付き合いをいただきたい。先ずは第一回目の結果である。選評中、五七五になっている「　」書きの部分は、選者の川柳である。川柳には川柳の返句である。

○課題「医療」の部

特選

ありがとう赤子のように母を抱く　奈美江

秀句

手をあててわかるドクター居た昭和　隆

難病の少年が抱くヒトゲノム　道代

再生の医療地球は岐路に立つ　堂太

【選評】

特選／選者も「母一〇二まるい背中を抱く介護」を経験した。辛くても介護を支えるのは決して忘れることのない「ありがとう」の心。

秀1／今にして思う。小さい頃に診てくれた田舎のおばあちゃん先生の安心感。あれは何だったのだろう。

秀2／生物種のゲノムに完全はない。難病は個別の人の問題でなく人類が抱える共通課題。

秀3／紛争・戦・気候変動等々、ヒトが病むことで病んだ地球の再生医療を問う。

○雑詠の部

特選

失いしもの無き両手茜色　ひろし

秀句

弱点の中に潜んでいる魅力　北朗

空一枚国境線のない平和　みち子

進化論霊長類は言い過ぎた　野蒜

【選評】

特選／河島英五『水瓶の唄』の一節、♪拳を固く握りしめて何も持たずにうまれてきたのに、を思い出した。

秀1／「勇敢で強いばかりが善なのか」。精神は強くて狭いことも、広くて弱いこともある、とパスカルの言。

秀2／そのとおり。同年同月同日、「ウクライナの空もロシアの空も青」。ガザの空もイスラエルの空も同じ。何という地上の落差。

秀3／悠久の進化の果てに思う。「万物の霊長などというジョーク」、と。

サザンカ

旗めく